

当館の収蔵資料の中に「^{いなむらたんげん}稲村坦元コレクション」と呼ばれている一群があります。この資料群は、仏教史学者・文化財保護推進者で埼玉県文化財行政にも多大な功績を残した故稲村坦元氏（明治26年（1893）～昭和63年（1988））から寄贈していただいたもので、考古資料や典籍のほか、各地の文化財を採訪した際に写し取った金工品や石塔類の拓本や寺社の版木から刷りだした刷物などがあります。これらのものの中には現在所在不明のものもあるため、大変貴重な資料です。

右の拓本は、その中の一点（SPM1971-001-0181）で、同氏の編集による『武蔵史料銘記集』（昭和41年（1966）刊行）にも掲載されている^{わにぐち}鱈口（社殿の正面などに吊り下げて参拝者がたたいて音を出す^{ほんおんぐ}梵音具）です。同書には「熊野三所権現御寶前鱈口一ヶ 武州比企郡唐子郷總徳寺 明徳五年卯月十五日」とあり、明徳5年（1394）に比企郡^{からごごう}唐子郷（現東松山市）の^{そうとくじ}總徳寺という寺院にある熊野三所権現に懸けられていたものとされています。

その後、平成元年（1989）に刊行された『新編埼玉県史』にも掲載されましたが、そこでは「総徳寺」とあり、唐子郷から東松山市であるとするものの総徳寺熊野三所権現は未詳としています。

江戸時代の地誌『新編武蔵風土記稿』にも記載ありません。

この鱈口については、現物を歴史資料館（現嵐山史跡の博物館）で展示した事がありました（企画展「ささげられた祈り」平成5年（1993）に開催）。その際に銘文を確かめたところ、銘文中の「總」の文字に違和感を感じました。拓本でははっきりしませんが、「糸ヘン」が確認できませんので、文字としては「息」となります。また、下の

「心」の部分も直線的に彫られており、は「奥」のくずし方によく似ています。さらに「奥」とくずし方が酷似している文字に「興」という文字があり、この文字である可能性が最も高く、この寺院名称は「興徳寺」と考えられます。「コウトクジ」と聞くとすぐに思い出されるのが嵐山^{あおくら}町大蔵に現存する「向徳寺」です。「向徳寺」は^{じしめう}時宗寺院で宝治3年（1249）の紀年銘がある善光寺式の阿弥陀三尊像（国重要文化財）が有名です。この向徳寺が中世には唐子郷にあったことが伝えられています。さらに、境内に熊野社が祀られていたことは『新編武蔵風土記稿』からも確認でき、この鱈口の銘文に合致します。これらのことからこの鱈口は、興徳寺（現向徳寺）の熊野社にあった鱈口であるとの結論を得ることができます。展示した当時からこの鱈口が向徳寺のものではないかと思っはいましたが、稲村坦元氏という斯界の大家が編集した活字に間違いはないだろうという呪縛に捕らわれ、図録等に「興徳寺」と表記できなかったことを今でも後悔しています。「百聞は一見にしかず」、既存の活字にとらわれず、現物を精査して行くことの重要性を痛感する次第です。

（常設展示担当 渡 政和）

